博士学位論文審査要旨

２００９年6月２５日

論 文 題 目：　古代後期文学の表現史
——『源氏物語』の「この君」を通して——
学位申請者：　松田　もと子
審 査 委 員：
主　査：　文学研究科　教授　岩坪　健
副　査：　文学研究科　教授　廣田　收
副　査：　文学研究科　教授　石井　久雄

要　　旨：

論者は、『源氏物語』において一般的な人物呼称とみえる「この君」が、限られた登場人物について極めて特徴的な用いられ方をしていることに注目した。すなわち「この君」という語が、和歌の伝統に立つ語であることと同時に、漢詩文の伝統に立つ語であることを初めて明らかにした。このような指摘は『源氏物語』をはじめとする古代後期文学の表現が、和歌と漢詩文双方の伝統の上に成立するものであることを解明したという点で画期的である。

本論文は五章から構成される。

第Ⅰ章では、『源氏物語』において全部で130例ある「この君」を取り上げて分析したところ、「この君」と呼ばれる人物は限定されることが判明した。最多は、光源氏の子息と世間では思われている薫で、31例を占める。とりわけ幼児期の薫は、第36巻（柏木）と第37巻（横笛）の二巻に集中して、「この君」と呼ばれている。その理由は、以下の章で明らかにされる。

第Ⅱ章では、竹に注目した。というのは「この君」とは、「この・君」という人物呼称のほかに、四世紀の中国の文人として名高い王徽之が竹を指差して「此君」と呼んだ故事に基づき、竹の別名でもあるからだ。そこで『古今和歌集』で竹の和歌を調べると、957～959番歌に「竹」が詠みこまれている。その３首を含む連続する６首（955～960番）の歌群の内容は、『源氏物語』の第34～39巻の主な流れと重なっていることを指摘した。すなわち竹の歌を含む連続した六首を踏まえ、その詠歌の内容を発展させた形で『源氏物語』が構成されたと読めるのである。このように、ある程度まとまりを持った和歌の配列が、物語の広範囲にわたる構成のもととなるという読み方は、新しい試みである。

第Ⅲ章では、第Ⅰ章で指摘した、幼児期の薫を指す「この君」は、王徽之の竹の故事「此君」に由来することを論じた。光源氏は、わが子ではない薫を疎んじていたが、やがて可愛がるようになる。その転換は、竹の愛好すべき美質が薫にも重ねられていることによると考えられる。『源氏物語』は多くの漢籍を踏まえているが、登場人物の造形に深くかかわり、物語の広い範囲にわたる構成のもととなっていることは、当時の物語のあり方にとって重要な問題となる。

また、幼児期の薫と成人後の薫は、まるで別人のように描かれていることが、以前から問題にされてきた。しかし、王徽之にまつわる音楽の故事が成人した薫の造形に影響を与えていることを考慮すると、この幼児期と成人期との断絶も解決される。

第Ⅳ章では、古代後期文学の漢詩文や和歌において、竹をめぐる表現がどのような特徴をもつかについて考察した。たとえば漢詩文には、竹の色彩を青と白で対比させている。その表現は、幼児期の薫の描写に利用されている。また、歌語と漢籍という、異なる両者を散文で融合させた

作品として、『枕草子』の「五月ばかり」段を取り上げ、新しい解釈を提案した。竹に連なる縁語には喚起力があり、歌語を組み合わせて物語に展開させることも可能である。『源氏物語』では歌語や故事をもとに人物を造形して、長編物語を構成するに至ったと考えられる。

第Ⅴ章では、和歌における「この君」の用例を時代別に調査して、『萬葉集』から室町時代までの特徴を考察した。古代前期においては諧謔的な呼びかけとして用いられることが一般的であったが、平安時代後期から故事を踏まえるようになる。やがて、竹が祝意を表すものの代表になると、故事本来の意味を離れ、類型的な詠まれ方が目立つようになる。その後、室町時代には時代状況を反映して、天皇や主君を表す言葉へと変化してゆく。このように「この君」という語が和歌の世界で数百年間、生き続けたことを明らかにしている。

以上の考察により、「この君」という言葉は、和歌の伝統と故事の表現法を受け継ぎ、『源氏物語』を形作る要となっていたことを新たに論じた。ただし本論文中にも指摘されているが、「この君」という一つの言葉に基づく考察だけでは限界がある。今後は、さらに他の事例を加えて精査し、仮説の論証をより堅固なものにする必要があろう。

本論文により、今まで注釈書にも指摘されていない漢詩文や和歌の典拠が発掘されたことは、大きな収穫である。新たな『源氏物語』研究の領域を拓いたものとして、本論文は高く評価できる。よって本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２００９年6月２５日

論 文 題 目：　古代後期文学の表現史
——『源氏物語』の「この君」を通して——
学位申請者：　松田　もと子
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　岩坪　健
　副　査：　文学研究科　教授　廣田　收
　副　査：　文学研究科　教授　石井　久雄

要　　旨：

上記審査員３名は、２００９年6月１８日（木）午後４時半から、約２時間にわたり、徳照館１階会議室において、学位申請者に対して、学力確認のための口頭試問を行った。

学位申請者は、審査員からの質疑応答に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、語学（英語）についても、十分な学力を備えていることが確認された。

以上により、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 古代後期文学の表現史 ―『源氏物語』の「この君」を通して―
氏　　名： 松田　もと子

要　　旨：

「この君」という人物呼称のあり方を通して『源氏物語』を新たに読み直し、古代後期文学の表現史につながる問題として考えることが本論文の目的である。

第Ⅰ章では、『源氏物語』における人物呼称としての「この君」について考察した。本文中に百三十例みられる「この君」は呼称「君」の示す特徴と重複する部分が大きいが、本章では「この君」独自の性質に限って考えることとした。

「この君」はそれぞれの文脈の中では、同一場面の直前の文脈で「君」系統の呼称で呼ばれた人物が、再び場面の中心に据え直される際の呼称といえる。会話や心内語であれば話者である登場人物の視点に従うものとなる。地の文の場合も語り手が寄り添う人物の視点に近づくことが多い。そこで、場面の中で対置される別の人物との関係を意識して取り立てて、「この・君」と指示されることもある。また、年長者や上位者から関心の対象として用いられることもある。

このような性質をふまえると、「この君」が用いられる登場人物はある程度限られる。主要な登場人物のうち、光源氏をはじめとする左大臣家の血統をひく人物たち、宇治十帖では中君や浮舟、また特定の巻にのみ中心人物として登場するものなどがある。それを巻による特徴の違いとして整理すると、物語を七つに区分することができる。中でも柏木巻から横笛巻まででは、幼児期の薫がほぼ連続して七例と、集中して「この君」と呼ばれている。これは故事をふまえた内容によるものとⅡ章以降で考察するが、人物呼称の問題としても特徴ある表現であることが見出せる。

第Ⅱ章では、若菜上巻から夕霧巻あたりまでの物語の叙述は、『古今和歌集』巻十八雑下の連続する六首、九五五～九六〇番を歌群としてふまえたものであることを指摘した。巻十八前半部は「世」や「憂し」を基調とした配列になっており、この六首にも共通している。

詠歌の内容の概略をまとめると、九五五・九五六番歌は、「山」に入って出家してもなお、「ほだし」に惑わされる人を詠み、そのときはどこへ行くのかと問いかける。九五七・九五八番歌は、「竹」や「筍」の修辞を詠みこみ、「憂きふし」を嘆く。筍によそえる「子」に、なぜ生まれてきたのかと、この歌も問いただす形をとる。九五九番歌は竹によそえて中空な身の上を悲しむ高津（たかつ）内親王の歌とされている。九六〇番歌は「わが身」と「人」とを対比しながら「憂き世の中」を悲しいものと締めくくる。

このように、ある程度まとまりを持った配列が、物語の広範囲にわたる構成のもととなるという読み方は、従来の引歌の概念にはなかったものである。竹の縁語にあたる歌語を叙述の要所にちりばめながら大きな構成を支えることなど、今後の物語の研究に新たな視点を持ち込むことが可能になると考えられる。

具体的には、『古今和歌集』巻十八雑下にみえる、竹を詠む和歌を含む連続した六首が、『源氏物語』の若菜上巻から夕霧巻までの主な流れと重なっていると考えられる。親子の問題・出家による救済の限界・密通と不義の子の出生・横笛の相伝・皇女ひいては女性の結婚の困難さなどといった内容は、『古今和歌集』の詠歌の内容を発展させた形で構想されていると読めるのである。

それぞれの和歌についていえば、九五五番歌と九五六番歌の「ほだし」や「山に入る」という言葉が、朱雀院の出家や女三宮の結婚のあり方につながっている。これをふまえて朱雀院と女三宮の親子関係が描かれる。九五七番歌と九五八番歌の「竹」と「筍」、「うぐひす」といった歌語は、薫を「憂き節」の中に生まれた存在として造形し、光源氏の立場を相対化することになる。

これをふまえて「この君」と呼ばれる罪の子薫の出生や柏木の存在が描かれる。また、「竹」は多彩な縁語関係のつながりから物語を横笛の相伝へと導いてゆく。九五九番歌の左注からは、内親王が結婚生活を送る困難さが暗示される。朱雀院の内親王二人の対比的な運命や女性の生き辛さを描いたのち、九六〇番歌をなぞるように女性の生き方そのものを嘆き、「憂き節」の絶えることがない「世」の物語を組み立てている。

和歌を詠出する手法として、素材の組み合わせを発展させてその可能性を探ることは欠かせない営みであったと考えられる。物語をつくる過程もその延長上に存在している側面があり、主題を描くよりはむしろ歌語の力を最大に引き出すことを意図した書き方がなされていた。歌集を享受する動きをより立体的に発展させ、配列された和歌に奥行きをもたせて仕立てなおす、いわば「物語化」して読ませることを実現させたのが『源氏物語』だったのではないだろうか。

第Ⅲ章では、第Ⅰ章でふれた人物呼称「この君」のうち、幼児期の薫を指すものは王徽之（おうきし）の竹の故事「此君（しくん）」をふまえたものであることを指摘した。

『源氏物語』において、幼児期の薫に直接用いられる七例と、薫を暗示する二例、計九例の「この君」は、中国の六朝期の人物である王徽之の言葉による、「此君」の故事によるものであると考えられる。また、唐の白居易の詩には、故事「此君」をふまえて竹を擬人化することなど、漢詩における竹の表現方法がみえる。『源氏物語』は故事の背景や、竹を詠む漢詩に用いられる青と白の色彩の対比といった表現方法まで、総体的に直接的な享受をしており、物語の構成に反映されているといえる。本文中の人物呼称である「この君」をはじめとして、縁語などの竹に関連する表現とともに読み解けば、幼児薫に対する光源氏の認識の転換は、竹の愛好すべき美質が薫にも重ねられていることからもたらされたと考えることができる。『源氏物語』には多くの漢籍をふまえているとの指摘が従来あるが、登場人物の造形に深くかかわり、物語の広い範囲にわたる構成のもととなっていることは、平安中期の物語のあり方にとって重要な問題となる。『世説新語』などを通して日本にも伝わった王徽之の故事には、脱俗の境地に至ろうとして奇行にも見える言動が数多く見られる。竹を愛するあまりに「此君」と呼んだ故事は、愛すべき美質を備えた薫に重ねることができる。

また、王徽之の音楽故事二つについても、「此君」と支え合う形で『源氏物語』を構成する要素になっていると考えたい。弟の死を琴の音色の変化によって確かめることや、横笛の音色のみを通じて理解し合うことも、表面上は『源氏物語』の内容と重なる部分が大きいわけではないが、成人後の薫の造形に影響を与えている。幼児期の薫と成人後の薫との間には断絶があるように見えるが、音楽関係の叙述をたどると、両者は矛盾なく構成されていると考えることが可能になるだろう。

第Ⅳ章では、竹をめぐる漢詩文や和歌にみられる表現の特徴について考察した。漢籍の表現方法をふまえた引用のあり方、和歌を形作る歌語について、そしてその両方を融合させた平安中期の散文にみえる表現の到達点について考えた。漢詩文の「此君」引用の方法として、竹を擬人化し、疑問や反語の形をとるという特徴がみられた。竹の色彩である青と白などの対比も用いられている。日本での漢文学にもそれらの特徴は表れているが、『源氏物語』の中では、幼児薫の表現として生かされている。そして、歌語と漢籍という、異なる両者を散文で融合させた作品として、『枕草子』「五月ばかり」段について、新たな解釈を試みた。呉竹の枝によって和歌を詠ませようとした殿上人の意図、故事をふまえてあいさつに代えようとした清少納言のはじめの意図、故事の意味するところの危うさに気付いて知らないと言い続けた清少納言の意図、と内容をたどり直すことができる。「此君」を呼びかけの「この君」に置き換えて、臨場感のある場を構築するという、新たな引用の手法が生まれたことになり、『源氏物語』と同時代の作品として注目される。

和歌における竹の表現がうかがえるものとしては、同時代に『紫式部集』の詠歌がある。この中の詠歌とⅡ章で指摘した『古今和歌集』や『源氏物語』の詠歌との共通点がすでにみられるこ

とを指摘した。竹に連なる縁語には喚起力があり、歌語を組み合わせて物語に展開させることも可能である。『源氏物語』では、歌語や故事をもとに人物を造形し、長編物語を構成するに至ったと考えられる。

第Ⅴ章では、和歌における「この君」の用例を通時的にたどり、『萬葉集』から室町時代ごろまでの特徴を考察した。はじめは『萬葉集』の例のように、諧謔的な呼びかけと思われるものが、平安後期ごろから故事をふまえるようになる。但し、平安中期の『和漢朗詠集』で、「この君」と対置される句が「吾が友」という言葉と混同されたことにより、そのまま竹を意味する言葉は「この君」と「吾が友」が並存することになり、『堀河百首』で大きく流布することになった。平安後期頃から和歌に詠み込まれるようになった「この君」は、祝意を表す竹の和歌の需要ともあいまって故事の本来の意味から離れてゆく。定数歌が多く詠まれる頃には、竹に縁のある他の歌語とともに、類型的な詠まれ方が目立つようになった。その後室町時代には時代状況を反映して、天皇や主君を表す言葉へと変化してゆく。時には語義すらも変化しつつ、「この君」は竹にまつわる修辞の発展とともに歩み、和歌の世界で数百年間を生き続けたのであった。

これらのことから、「この君」という言葉は、和歌の伝統と故事の表現法の両方を受け継ぎ、物語内部の呼称の特徴をも示しつつ、主に二部世界の物語を形作る要となっていたことを新たに指摘することができる。小さな言葉である「この君」は、人物呼称として、歌語を呼び出す契機として、故事に基づいた漢籍の表現方法をもたらすものとして、と様々な顔を持つ言葉であった。幼児薫は、まず人物呼称の働きによって、光源氏や夕霧の関心の中心に置かれ続ける。次に歌語の連鎖や引歌によって読めば、『古今和歌集』九五七番歌が反語をもって生を問いただした歌に、光源氏の詠歌は罪の子薫の生を認めると切り替えして答えたことになる。そして故事「此君」によって読めば、薫は一日も離れられないと反語で強調されるほどの、愛すべき美質を備えた存在として生まれたとも読める。物語の中に埋もれてまだ指摘されていなかった引歌の方法、薫像のもととなった故事と、注釈書も指摘していなかった典拠を見出すことができ、物語の読み方の新たな可能性を開くことができたと思われる。古典文学の研究において、大きな問題につながる契機は小さな言葉の奥にこそ見出されるのである。